郷土食の魅力に気付くことのできる児童の育成
―新しいなごやめし作りの活動を通して―

教職実践基礎領域
早川　美紗

Ⅰ　はじめに

自分の郷土を居場所だと感じている人はどのくらいいるのだろうか。この疑問が本研究のはじまりである。

私自身、子どもの頃から生まれ育った町が大好きであり、現在でも自分の居場所であると感じている。特に名古屋の食文化には強い愛着がある。

一方で、名古屋市の観光文化交流局が実施した調査によると、名古屋に住んでいる人は、「愛着度」、「誇り度」、「推奨度」の全てにおいて他県よりも低いという傾向がみられた。

将来、名古屋に愛着を持ち、その魅力を日本中に広げていこうとする人を育てるのであれば、小学校生活の間に、学校でその食の魅力に気付く必要がある。

食育を通して郷土食の魅力に気付いていく子どもたちの姿をここに報告する。

Ⅱ　主題設定の理由

1　食育の重要性について

（1）小学校段階での食育の重要性

人が生きていくための基盤となる食を学ぶことは、豊かな人間性を育むうえで重要であるといわれてきた。平成 27 年に改正された食育基本法の前文には、次のように示されている※1)。

> 食育はあらゆる世代の国民に必要なものであるが、子どもたちに対する食育は、心身の成長及び人格の形成に大きな影響を及ぼし、生涯にわたって健全な心と身体を培い豊かな人間性をはぐくんでいく基礎となるものである。

豊かな人間性を育むために、「小学校段階において食育を行う」ことの重要性が挙げられていることが分かる。さらに、日本での「食」を取り巻く問題についても次のように示されている※1)。

> 社会経済情勢がめまぐるしく変化し、日々忙しい生活を送る中で、人々は、毎日の「食」の大切さを忘れがちである。（中略）また、豊かな緑と水に恵まれた自然の下で先人からはぐくまれてきた、地域の多様性と豊かな味覚や文化の香りあふれる日本の「食」が失われる危機にある。

この指摘から、日本の社会的環境の変化により、「食」を取り巻く環境も変化してきており、人々が食の大切さを忘れてしまうことから、日本や地域特有の食文化が失われてしまうのではないかという懸念を読み取ることができる。

この問題に対して、人々が日本や地域特有の食文化を当たり前に感じているため、「食」を大切にすることができないのではないかと考える。

（2）新学習指導要領から見た食育

平成 29 年３月告示の新学習指導要領解説（家庭科）の目標は次のように示されている※2)。

> 生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

家庭科の教科内においても、食における実践的・体験的な活動を行うことの重要性が挙げられていることが分かる。また、「生活の営みに係る見方・考え方を働かせ」については、次のように示されている※2)。

> 生活の営みに係る見方・考え方を働かせとは、家庭科が学習対象としている家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、生涯にわたって、自立し共に生きる生活を創造できるよう、よりよい生活を営むために工夫することを示したものである。

学習を行ううえで、①「協力・協働」、②「健康・快適・安全」、③「生活文化の継承・創造」、④「持続可能な社会の構築等」の視点をもつことの重要性を読み取ることができる。本研究では③「生活文化の継承・創造」に注目したい。小学校段階においては、この視点に対して、次のように示されている※2)。

> 「生活文化の継承・創造」については「生活文化の大切さに気付くこと」を視点として扱うことが考えられる。

生活文化の継承・創造を考えるためには、「生活文化の大切さに気付くこと」が重要であると読み取ることができる。

これらのことから、小学校段階において食文化の視

点から郷土の魅力に気付いていく学習を行うことは重要であると考える。

（３）食育推進基本計画

平成 28 年３月には、過去５年間の食育に関する取り組みの成果と課題を踏まえ、第３次食育推進基本計画が提示された。基本的な方針として、新たに取り組むべき重点課題の一つに「食文化の継承に向けた食育の推進」が規定された。その具体的な施策の一つとして、次の取り組みが示されている※3)。

> **地域の食文化の魅力を再発見する取組**
> **→伝統食材等の魅力再発見等のための地域における食育活動の推進**

この指摘から、「地域の食文化の魅力を再発見する」ことが、食文化の継承につながっていくと読み取ることができる。

地域の食文化は、自分自身の身近に、当たり前にあるものであるからこそ、その魅力に気付きにくい。それらに焦点を当てることが大切であると考える。

２　連携協力校の児童の実態から

（１）調査対象

名古屋市立公立小学校　第６学年　32 名

（２）児童の様子

連携協力校の児童とのかかわりを通して、地域に対する次のような子どもの姿に気付いた。

○　自分の住んでいる地域は好きだが、その地域の魅力に気付けず、当たり前のものだと思っている。

児童の実態を明らかにするため、地域についての質問紙調査を行った。

（３）調査日　平成 29 年４月

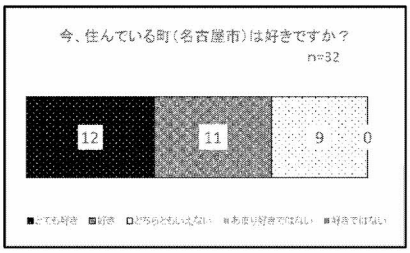
（４）質問紙による調査結果

児童の地域に対する意識及び、名古屋市の食の魅力に対する意識を調査するため、質問紙による調査を行った。その結果を以下に示す。

①地域に対する意識調査

設問：今、住んでいる町（名古屋市）は好きですか？

名古屋市について、32 名中 23 名の児童が、「とても好き」、「好き」と回答した。このことから、大半の児童は名古屋市に対して好意的に考えていると言える。



【資料１　地域に対する意識調査】

②名古屋市の食の魅力に対する意識調査

設問：名古屋で有名な食べ物は何を知っていますか？

この調査は、児童が名古屋市の食の魅力に気付いているかについて、調査するためのものである。児童の記述数は平均 2.9 であった。

また、32 名のうち、有名な食べ物を記述することができない児童は３名いた。その３名は①の地域に対する意識調査において、「とても好き」、「好き」と回答していた。

この結果から、名古屋市に対して好意的に考えていても、名古屋の魅力を挙げることのできない児童の実態が分かった。

３　目指す児童の姿

今日的な教育課題と、連携協力校の児童の実態を踏まえ、地域の食文化の魅力を再発見することができるようにするという点に着目した。そこで、本研究の目指す児童像を以下のように設定した。

> **郷土食の魅力に気付くことのできる児童**

Ⅲ　研究の内容

１　研究の仮説

> **小学校段階における食育において、児童の学習方法に、学校給食の活用・地域教材の活用・体験学習を取り入れることにより、郷土食の魅力に気付くことのできる児童になるだろう。**

２　研究の方法と手立て

本研究では、年間を見通し、段階を追った実践を行い、目指す児童像「郷土食の魅力に気付くことのできる児童」へ迫っていく。

そこで、実践Ⅰにおいては、「郷土食に関心をもつことのできる児童」を目指す児童像として設定する。郷土食に対する児童の興味関心を喚起することを目的とし、意図的に学習活動に取り組ませていく。

次に、実践Ⅱにおいては、実践Ⅰを生かした学習活動を行う。実践Ⅱでは、実践Ⅰの学習により、郷土食への関心をもった児童が、主体的に郷土食に関わることのできるような支援を行う。

以上のように、実践Ⅰ・Ⅱと段階を追った実践研究を行っていく。その際に、学校給食の活用・地域教材の活用・体験学習を、それぞれの場面に対応させて位置付け、手立てとして活用する。実践Ⅰ・Ⅱの手立ての位置付けを以下に示す。

手立て①　学校給食の活用

学校給食は生きた教材とも言われるように、児童にとって身近なものであり、食に関する指導を効果的に進めるための重要な教材として用いることができる。

平成 22 年に告示された食に関する指導の手引きにおいても次のように示されている※4)。

> **学校給食に地場産物を活用したり、地域の郷土食や行事食を提供したりすることを通じ、地域の文化や伝統に対する理解と関心を深めることもできるなど高い教育効果が期待できる。**

また、学校給食法第２条の学校給食の目標においては、次のように示されている※5)。

> 我が国や各地域の優れた伝統的な食文化についての理解を深めること。

児童にとって身近である学校給食を活用することで、地域の食文化について理解や関心を深めることができると考える。

また、名古屋市の取り組みとして、平成16年度より小学校給食において、「みんなで食べる！なごや産の日」を設け、地元の食材を使用した献立、「名古屋めし」など特徴のある献立を実施している。また、平成23年度より、「ふるさと献立」を設け、名古屋の特産物を使った献立や、身近な郷土料理などを「ふるさと献立」として紹介し、この地域に受け継がれる食文化に対する関心を高める取り組みをしています。

児童にとって身近である学校給食の取り組みを生かして、教材として活用することは高い教育効果があると考える。

実践Ⅰでは、「みんなで食べるなごや産の日」の給食を活用し、地産地消の食材が使われていることを理解させ、地域の食文化に関心をもたせる。

実践Ⅱでは、「ふるさと献立」の給食を活用し、地域の食文化の献立としての構成を知り、地域の食文化へ関心を深めさせる。

手立て②地域教材の活用

次山（1992）は、地域素材を選択する際には子どもたちの立場と教師の立場の双方からの検討が重要であると述べている※6)。

> **子どもたちの立場**
> ①　興味・関心が持て、意欲的に取り組めるか
> ②　子どもたちの生活経験に根ざし、観察や体験などの活動から、実践的に学ぶことができるか
> ③　感動や喜びが味わえるものか
> **教師の立場**
> ①　各学年の学習の目標に即しているか
> ②　子どもたちが解決可能な問題を含んでいるか
> ③　具体的なものであるか

この二つの視点を考慮し、地域教材として、実践Ⅰ・Ⅱと共通して「なごやめし」を取り入れていく。

手立て③体験学習

平成29年３月に公示された新学習指導要領解説には、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の視点として、次の点が指摘されている※2)。

> 各教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること。

この指摘から体験活動を一層重視していくことが必要であると分かる。さらに、家庭科においては、次の点が留意事項として挙げられている※2)。

> 家庭科では「調理や制作等の手順の根拠について考えたり、実践する喜びを味わったりするなどの実践的・体験的な活動を充実すること」

この指摘から、教科の特質に応じて体験学習を進めていくことの重要性が分かる。加藤（1984）は、すぐれた体験学習には、共通した三つの特性があると述べている※7)。

> ①　生活の中にある題材を選ぶこと。
> ②　体を通して学ぶこと。
> ③　学習者の主体的「参加」

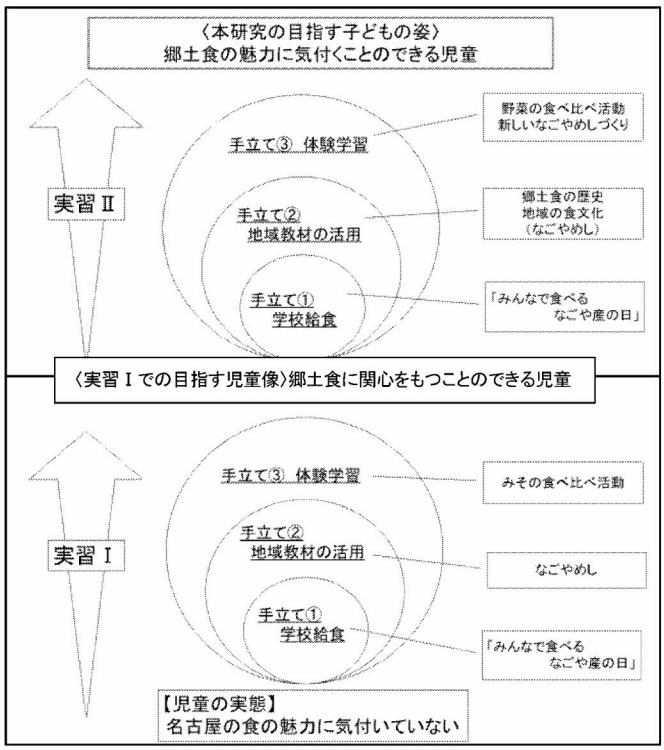
この三つの特性を満たすことで、効果的な学習活動にしていくことができると考えられている。本研究では、三つの特性を以下のように位置付ける。

実践Ⅰでは、①地産地消・なごやめし、②みその食べ比べ活動、③児童の意見の重視、として単元内に位置付けていく。

実践Ⅱでは、①地産地消・なごやめし、②野菜の食べ比べ活動・調理実習、③児童の意見の重視、として単元内に位置付けていく。

３　研究構想図

本研究では、三つの手立てを、家庭科授業実践における単元内に位置付け、目指す児童像に迫っていく。



【資料２　研究構想図】

４　検証項目について

本研究の検証項目は、実習Ⅰ・Ⅱにおけるそれぞれの手立てに応じて設定する。

Ⅳ　教師力向上実習Ⅰ

対象：名古屋市立公立小学校　第６学年 32 名 期間：平成 29 年５月８日～６月２日 単元：家庭科「朝食から健康な１日の生活を」

１　実践の内容

本実践の学習内容は、自らの朝食を振り返り、栄養バランスの良い朝食を摂ることの大切さを理解した上で、朝食に適している「いためる調理」を学習することである。

そこに、本研究における「郷土食」を関連させて、三つの手立てに基づく三つの学習活動を設定する。

この活動を通して、実践Ⅰにおける目指す児童像である「郷土食に関心をもつことのできる児童」へ迫っていく。

２　単元計画

指導計画		
学習内容	時数	手立て
毎日の朝食を振り返ろう ・自分が毎日どんな朝食を食べているのか振り返り、朝食を食べることの良さについて考える。	1	
いためて朝食のおかずを作ろう （1）栄養バランスを考えよう ・栄養素の体内での働きによって３つのグループに分けられることを学習する。 「みんなで食べるなごや産の日」って知ってる？ ・「みんなで食べるなごや産の日」について学習する。	1	①
（2）調理実習の計画を立てよう	1	
（3）いためる調理をしよう ・「いためる」という調理方法の特徴について学習する。 ・学習したことから調理計画の見直しを行う。	2	
・調理実習を行う。	2	
・調理実習の振り返りを行う。	1	
名古屋の郷土食について知ろう ・名古屋の食文化について学習し、多く使用されている味噌の食べ比べを行う。	2	② ③

【資料　教師力向上実習Ⅰの単元構想】

３　手立て

手立て①　学校給食の活用　－関心をもつ－

ねらい：地域の食文化へ関心をもつ

第２時の栄養バランスについて学習する場面において「みんなで食べるなごや産の日」の給食を活用する。給食に地元の食材が使われていることや、地産地消の良さを学習する活動を行う。

この活動を通して、地域の食文化に関心をもつ児童の姿を期待する。

手立て②　地域教材の活用　－知って関心を深める－

ねらい：手立て①により行われた活動により、地域の食文化に関心をもったうえで、地域の食文化について知り、より関心を深める。

第９時「名古屋の郷土食について知ろう」では、なごやめし普及促進協議会が行った人気投票において、決められた「なごやめし 20 選」をクイズ形式で学習する。児童が日常生活で当たり前に食べているものも「なごやめし」であることを学習する。

また、それぞれの特色やルーツを紹介し、なごやめしは、どんな味でできているか考えさせ、手立て③での体験学習へとつなげていく。

この活動を通して、地域の食文化についてもっと知りたいと思う児童の姿を期待する。

手立て③　体験学習　－感じる－

ねらい：体験学習を通して、地域の食文化の良さを実感する。

第 10 時では、第９時における「なごやめしの味にはみそがたくさん使われている」という児童から出た意見を重視して、「豆みそ」（赤みそ）の良さを感じさせるため、みその食べ比べ活動を行った。

みその種類として、「豆みそ」、「合わせみそ」、「白みそ」の三種類を準備する。味・香り・色といった観点から、みその食べ比べを行い、それぞれのみその特徴や、なごやめしに多く使用されている豆みその良さを感じさせる。

この活動を通して、地域の食文化に対して自分の考えをもつことができる児童の姿を期待する。

４　検証項目について

実習Ⅰにおいては、次の３点を検証項目として設定する。事後調査として質問紙による調査、学習プリントにおける児童の記述内容の分析、授業中の児童の具体的な発言や児童の姿から、３つの手立てが有効であったのかを検証する。

（１）検証項目１

地域の食文化への関心をもたせる上で、学校給食の活用【手立て①】が有効であったのかを、学習プリントへの記述内容を分析し、合わせて児童の具体的な発言や姿からも検証する。

（２）検証項目２

地域の食文化を知り、関心を深めさせる上で、地域教材の活用【手立て②】が有効であったのかを、学習プリントへの記述内容を分析し、合わせて児童の具体的な発言や姿からも検証する。

（３）検証項目３

地域の食文化の良さを感じさせる上で、体験学習【手立て③】が有効であったのかを、学習プリントへの記述内容を分析し、合わせて児童の具体的な発言や姿からも検証する。

５　実践の結果と考察

（１）検証項目１

【実践の結果】

○学習プリントの児童の記述内容の分析から

第２時に、「みんなで食べるなごや産の日」の給食を活用し、地産地消の良さを学習した。授業の最後に「これからどのように行動していきたいか」を学習プリントに記述させた。その記述内容を「地産地消」に着目して、A・B・C・D に分類した。

A　地産地消の大切さに気付き、地産地消を通して地域を守るという観点から記述している…６名

> 土地で生産されたものをなるべく食べる。地域の人の仕事がなくならないように、名古屋を守る！

【資料３　分類 A の児童の記述】

B　地産地消の大切さに気付き、地産地消の取り組みをしたいと記述している…22 名

> これから、産地をよく見て意識して買ってみたい。あと、地産地消コーナーなどにも行って、買いたい。

【資料４　分類 B の児童の記述】

C　地産地消について記述しているが、記述内容が具体的でない…１名

> 地産地消のことを考えたので、地産地消のことをしていきたいと思う。

【資料５　分類 C の児童の記述】

D　地産地消について記述していない…１名

> 外国産の商品ではなく、日本の商品を買おうと思った。

【資料６　分類 D の児童の記述】

○児童の具体的な発言や姿から

授業後に、給食の献立表を用いて、地産地消の野菜や米が使われている日や、名古屋の郷土食が献立に入っている日を確認する姿を見た。その後には、こんなに使われているのかと驚いていた。

一方、授業実践を行った数日後に、こんな発言を聞いた。

> 昨日、スーパーに買い物についていって、地産地消のコーナー見てきたよ。いろんな野菜があった。
> 地産地消の野菜って、本当に新鮮でおいしいのかな。
> 実はあんまり変わらないんじゃないの。

【資料７　児童の発言】

【検証項目１の考察】

A・B・C に分類された 29 名の児童が「地産地消」に着目して、記述を行うことができたこと、また、授業後に地産地消や地域の食文化に関心をもつ児童の姿を見ることができたことから、手立て①は妥当であったと考える。児童にとって身近な学校給食を手立てとして用いたことにより、関心をもつことができたと考える。地産地消について記述することのできなかった分類 D の児童については、地域と地域以外という考え方を、日本と外国という観点におきかえて記述したと考えられる。

しかし、授業後の児童の発言【資料７】から、知識はあっても実感を伴っていないということが分かった。本実践での学習や社会科での既習事項などから、地産地消の良さを知識として、頭では分かっていても、本当にそうであるのか、疑問に感じていることが分かった。授業において知識を学習するだけではなく、学習したことを児童が「感じる」ための工夫が必要であると考える。

（２）検証項目２

【実践の結果】

○学習プリントの児童の記述内容の分析から

第９時に名古屋の食文化である「なごやめし」について学習した授業後の児童の振り返りとして、自由記述を行った。その記述内容を「なごやめしへの気付きが得られたか」に着目して、A・B・C に分類を行った。

A　「なごやめし」について、より一層学習をし、気付きを広げようとしている…９名

> なごやめしについて知れてよかったです。他にどんな、「なごやめし」があるのか調べてみたいです。

【資料８　分類 A の児童の記述】

B　「なごやめし」について自分の体験とつなげ、新たな気付きを得ることができている…11 名

> 名古屋の人の知らない「なごやめし」があってびっくりした。ふだん食べているものばかりだった。

【資料９　分類 B の児童の記述】

C　「なごやめし」について、授業で学習したことについての気付きを記述している…10 名

> 今まで知らなかった「なごやめし」もあったけれど、楽しかった。えびせんべいが「なごやめし」だと知らなかった。

【資料 10　分類 C の児童の記述】

○児童の具体的な発言や姿から

「なごやめし 20 選」で行ったクイズでは、学級の児童の大半が挙手をし、意欲的に授業に参加していた。自然と児童同士で話し合う姿や、知らなかったことを学習プリントへメモする姿が見られた。

また、授業中には、多くの児童から以下のような発言があった。

> 今まで知らなかったなごやめし、食べてみたい。なごやめしって他にもあるのかな。もっと知りたい。

【資料 11　児童の発言】

【検証項目２の考察】

児童全員が「なごやめし」の授業を通して、新たな気付きを得ることができたことや、授業への意欲的な姿から、手立て②は妥当であったと考える。

Aの児童は、関心の深まりだけでなく、実践Ⅱにおける「児童の主体的な活動」への意欲付けにつなげることができたと考える。

Bの児童は、授業での学習を通して、身近な食生活の経験と、地域の食文化をつなげて考えることができており、地域の食文化への関心を深めることができたと評価することができる。

Cの児童は、授業で学習したことから、「なごやめし」に関して新たな気付きを得ることができており、関心を深めることができたと考える。

以上のことから、児童全員が、地域の食文化である「なごやめし」について新たな知識を学習することで、関心を深めることができたと評価することができる。

（３）検証項目３

【実践の結果】

○学習プリントの児童の記述内容の分析から

第10時に、「豆みそ」、「合わせみそ」、「白みそ」を味・香り・色の観点から、食べ比べ活動を行った際に、授業後の振り返りとして、自由記述を行った。その記述内容を、「食べ比べ活動から感じたこと」に着目して、A・B・Cに分類を行った。

A　みその食べ比べをしたことにより、豆みその良さを感じている…１名

いろいろな味のみそが食べ比べられたので、良かったです。赤みそが濃厚で一番おいしかったです。

【資料12　分類Aの児童の記述】

B　みその食べ比べをしたことにより、みその違いを感じている…17名

いろいろな味のみそを食べられて、おいしく、種類で違うのだと分かった。豆みそのいろいろなことを知れてよかった。

【資料13　分類Bの児童の記述】

C　記述が不十分…12名

全部、おいしかった。

【資料14　分類Cの児童の記述】

○児童の具体的な発言や姿から

みその食べ比べ活動では、以下のような児童の活発な姿を見た。一口ずつじっくりと味わいながら、仲間と意見を交わしては、再び確かめていた。また、感じたことをこまめに記録する姿も見られた。他にも、準備したみそだけではなく、もっと多くの種類のみそで食べ比べをして、味の違いを知りたいと意欲を見せる児童もいた。

【検証項目３の考察】

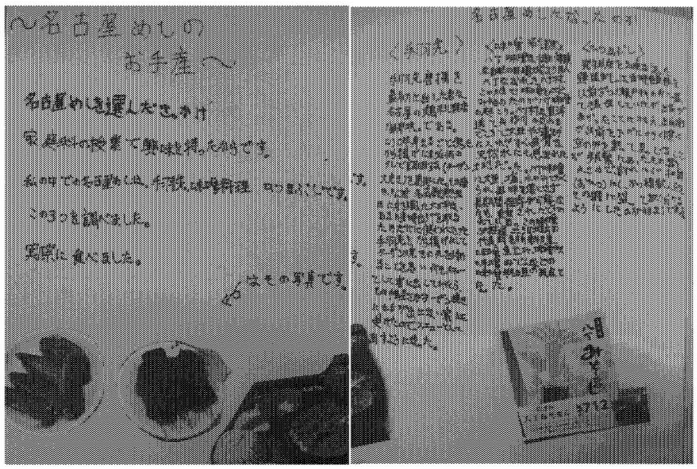
学習プリントの記述内容を見ると、みその食べ比べ活動から地域の食文化の良さを感じることができた児童は１名であった（Aに該当する児童）。この児童の記述内容からは、みその食べ比べ活動を行ったことにより、豆みその良さを感じることができていることが読み取れる。

Bの児童は、みその食べ比べ活動により、みその違いに気付き、それぞれのみそには、様々な特徴があると感じることができた。

以上の結果のように、みその食べ比べ活動から地域の食文化の良さを感じることのできた児童は少ない。しかし、本実践では、児童の意欲的な姿は見ることができ、関心は高まっていたと考えられる。また、食べ比べ活動を行う際にメモとして使用した記述内容には、多くの児童が豆みそ・合わせみそ・白みその良さを記述できていた。しかし、本時では、食べ比べをすることで、豆みその良さに着目させたかった。そうすることで、児童が「豆みそ」の良さを、他のみそと比べながら感じることができたのではないかと考える。児童に食べ比べをする意図を理解させてから行う必要があった。

６　教師力向上実習Ⅰを終えて

児童との話の中で、教師力向上実習Ⅱにおける家庭科の授業を楽しみにしている発言を多く聞いた。また、夏休みの自由研究では、家庭科の授業から関心をもった、「なごやめし」について研究をし、画用紙にまとめた児童もいた（資料15）。



【資料15　夏休みの自由研究】

また、学級の意見箱には、「新しいなごやめしを考えたい」という児童の意見が入れられた。その後の学級会において、家庭科の授業の中で進めていくことが決定した。

実践Ⅰの目指す児童像である「郷土食に関心をもつことのできる児童」は達成できたと考える。このような児童の姿も踏まえて、教師力向上実習Ⅱの手立てを考えていく。

Ⅴ　教師力向上実習Ⅱ

対象：名古屋市立公立小学校　第６学年 32 名
期間：平成 29 年９月 30 日～10 月 27 日
単元：家庭科「まかせてね　今日の食事」

１　実践の内容

実習Ⅱでは、「まかせてね　今日の食事」という題材において、実践を行った。この題材は、１食分の献立を立てる際に大切なことを理解させ、児童が実際に１食分の献立を考え、調理実習を行うという学習内容である。そこに、本研究での「郷土」と関連させ、「なごやめしの再現活動」を行う計画であった。しかし、実践Ⅰの後に児童たちから、「新しいなごやめしを考えたい」という意見があったため、計画を変更し、「新しいなごやめしづくり」を行った。

２　単元計画

指導計画		
学習内容	時数	手立て
１食分の献立を工夫しよう ・１食分の食事に必要なことを考える。	1	
地産地消って必要？ ・野菜の食べ比べを行う。	1	③
郷土食ってどうして大切なの？ ・郷土食の大切さ、なごやめしのもつ魅力について学習する。	1	②
「新しいなごやめし」を考えよう （1）１食分の献立を考えよう ・給食を用いて献立の立て方を学習する。 ・既習事項を踏まえて、献立を考える。	2	① ②
（2）調理計画を立てよう ・自分が考えた献立の調理計画を立て、材料の準備について考える。	1	②
（3）「新しいなごやめし」を作ろう ・調理実習を行う。	2	③
（4）調理実習の振り返りを行う （5）楽しく食事をするために工夫しよう	1	
まとめ 授業の振り返りを行う。	1	

【資料 16　教師力向上実習Ⅱの単元構想】

３　手立て

手立て①　学校給食の活用　－関心を深める－

ねらい：実践Ⅰにより行われた活動により、地域の食文化に関心をもったうえで、地域の食文化の献立としての活用を知り、より関心を深める

第４時の１食分の献立を考える場面では、「みんなで食べるなごや産の日」の給食を例に挙げ、献立の立て方を考えさせる。

この活動を通して、地域の食文化を献立に取り入れる際のバランスのとり方について理解し、地域の食文化に関心を深めることのできる児童の姿を期待する。

手立て②　地域教材の活用　－知って、感じる－

ねらい：実践Ⅰにより行われた活動により、地域の食文化に関心をもったうえで、郷土食の大切さや地域の食文化の歴史について学習し、良さを感じる。

第３時には、郷土食の大切さ、地域の食文化「なごやめし」について学習する時間を設定する。郷土食が先人からの思いが伝わってきていること、気候との関係や地域の歴史などを学習する。何故、なごやめしにはみそが多く使われているのかという児童からの疑問にも触れていく。

この活動を通して、地域の食文化の良さを感じることのできる児童の姿を期待したい。

手立て③　体験学習　－体験して、感じる－

ねらい：実践Ⅰにより行われた活動により、地域の食文化に関心をもったうえで、地域の食文化に触れる体験学習をし、良さを感じる。

体験学習として、野菜の食べ比べ活動、新しいなごやめしづくりを行う。野菜の食べ比べ活動では、地産地消の野菜と他県産の野菜を食べ比べ、地産地消の良さを感じることができる。また、新しいなごやめしづくりでは、地域の食文化の良さを生かした料理を自分で生み出す活動により、自分自身でなごやめしを作る満足感と、地域の食文化の良さを感じることができる。

この活動を通して、地域の食文化の良さを感じることのできる児童の姿を期待したい。

４　検証項目について

実習Ⅱにおいては、次の３点を検証項目として設定する。事後調査として質問紙による調査、学習プリントの児童の記述内容の分析、授業中の児童の具体的な発言や児童の姿から、３つの手立てが有効であったのかを検証する。

（１）検証項目１

地域の食文化への関心を深めさせる上で、学校給食の活用【手立て①】が有効であったのかを、児童の具体的な発言や姿から検証する。

（２）検証項目２

地域の食文化の良さを感じさせる上で、地域教材の活用【手立て②】が有効であったのかを、学習プリントへの記述内容の分析を行い、検証する。

（３）検証項目３

①野菜の食べ比べ活動

地産地消の良さを感じさせる上で、体験学習【手立て③】が有効であったのかを、学習プリントへの記述内容を分析し、合わせて児童の具体的な発言や姿からも検証する。

②新しいなごやめしづくり

地域の食文化の良さを感じる上で、体験学習【手立て③】が有効であったのかを、学習プリントへの記述内容を分析し、合わせて児童の具体的な発言や姿からも検証する。

５　実践の結果と考察

（１）検証項目１

【実践の結果】

○児童の具体的な発言や姿から

授業中には、地産地消の食材や地域の食文化が給食に取り入れられている回数の多さに驚く様子がみられた。また、児童が食べたことがある給食の献立内容を紹介すると、自分の経験と結びつけて考え、「みんなで食べるなごや産の日」の給食に関心もち、意欲的に授業に参加していた。

（２）検証項目２

【実践の結果】

○学習プリントの児童の記述内容の分析から

第３時に郷土食の大切さ、地域の食文化の歴史について学習した授業後の児童の振り返りとして、自由記述を行った。その記述内容を、「地域の食文化について感じたこと」に着目して、A・B・C に分類を行った。

A　郷土食についての学習をしたことから、地域の食文化の良さを感じている…16 名

> 郷土食には、土地の風土に合っていたり、昔の人の思いがあったり、とても良いことがたくさんある。なごやめしに、みそが多く使われているのには、深い理由があることが分かった。

【資料 17　分類 A の児童の記述】

B　郷土食について授業で学習したことを記述している…13 名

> なごやめしにみそがたくさん使われている理由が分かって嬉しかったです。

【資料 18　分類 B の児童の記述】

C　記述が不十分…１名

【検証項目２の考察】

実践の結果から、地域の食文化の良さを感じることのできた児童は 30 名中 16 名であった。16 名の児童の記述内容には、郷土食の魅力や地域の食文化である「なごやめし」のみその良さがあり、児童の中で印象に残ったと考えられる。

しかし、30 名のうち残りの 14 名は地域の食文化の良さを感じることができていない。郷土食の大切さや地域の食文化「なごやめし」の歴史についての学習は、教師がパワーポイントを用いて、児童の発言を取り上げながら進めていく形式で行われたものであり、児童にとっては話を聞く時間が多く、内容の押し付けになってしまった。児童が主体的に活動できるように、自分の考えを述べる時間や、友達と話し合う時間、自分で調べる時間の確保が必要であった。そうすることで、児童自身が地域の食文化の良さを言葉にして発言し、それを聞き合うことで、より児童の実感に近い形で良さに迫ることができたのではないか。

（３）検証項目３

①野菜の食べ比べ活動

【実践の結果】

○学習プリントの児童の記述内容の分析から

第２時に、小松菜とピーマンの二種類において、地産地消のものと、他県産のものを準備し、食べ比べ活動を行った。その授業後の児童の振り返りとして、自由記述を行った。その記述内容を、「野菜の食べ比べ活動から、感じたこと」に着目して、A・B・C に分類を行った。

A　野菜の食べ比べ活動から、地産地消の良さを感じている…23 名

> やっぱり、愛知県産の方が小松菜もピーマンも色が濃くて、小松菜は茎が太かった。

【資料 19　分類 A の児童の記述】

> 地産地消は良いことだと、あらためて分かった。愛知県産と他県産はかなり違った。

【資料 20　分類 A の児童の記述】

B　野菜の食べ比べ活動から、地産地消の野菜と他県産の野菜の違いを感じている…６名

> 小松菜の食べ比べをして食感や味が全然違うことに気付きました。

【資料 21　分類 B の児童の記述】

C　その他…２名

> 地産地消と他県産について比べられてよかった。今度、買い物に行くときに、地産地消のものを買ってみたい。

【資料 22　分類 C の児童の記述】

○児童の具体的な発言や姿から

児童が疑問に感じたことを検証する形の授業であったため、児童は意欲的に授業に参加していた。野菜を味わい、グループで話し合いをしながら学習することができていた。

【検証項目３−①の考察】

実践の結果から、31 名中 22 名の児童が地産地消の良さを感じることのできたことと、授業中の児童の姿から、手立て③の野菜の食べ比べ活動は妥当であったと考える。

児童が疑問に感じたことを問題として取り上げ、実際に体験学習として行うことで、机で学習するだけでは分からないことを感じることができたと考える。

また、資料 19・20 の記述内容を見ると、「やっぱり」や「あらためて」という言葉が入っており、23 名中 11 名の児童の記述から同様の記述が見られた。多くの児童が、知識として分かっていたことが、体験学習により、実感を伴ったものになったことが読み取れる。

一方で、31名中６名の児童が、野菜の食べ比べ活動から、地産地消の野菜の良さではなく、他県産との違いに着目してしまった。比較対照することにより、良さを明確にすることができると考えたが、６名の児童は、その違いに着目してしまった。児童が地産地消の良さに着目できるような工夫が必要であった。

②新しいなごやめしづくり

【実践の結果】

○学習プリントの児童の記述内容の分析から

第４～８時において、新しいなごやめしづくりを行った。食材や作り方などの計画段階から実施まで、調べ学習や話し合いを行い、児童が主体的に取り組むことができた。その活動に対する児童の振り返りとして自由記述を行った。その記述内容を、「児童が感じたこと」に着目して、分析を行った。多くの児童の記述内容からは、二つの共通した内容を読み取ることができた。A・Bとして以下に示す。

A　新しいなごやめしづくりが、印象に残り、楽しかった・面白かったと感じている…30名

なごやめし作りでは、自分たちで計画や調理をすることは少し難しかったけれど、とても楽しくおいしくできてよかった。なごやめしを作るのにたくさん工夫を入れることができてよかった。

【資料23　分類Aの児童の記述】

30名の児童が何故そのように感じたのかを、記述内容から分析を行うと、以下のように分類することができた。

楽しかった・面白かったと感じた理由	人数
なごやめしを上手く作ることができたという達成感	10名
材料や作り方などの計画を一から考えて実践することができた	10名
仲間と協力することができた	８名
工夫を入れることができた	３名
難しかった	１名

【資料24　30名の児童の記述内容の分析】

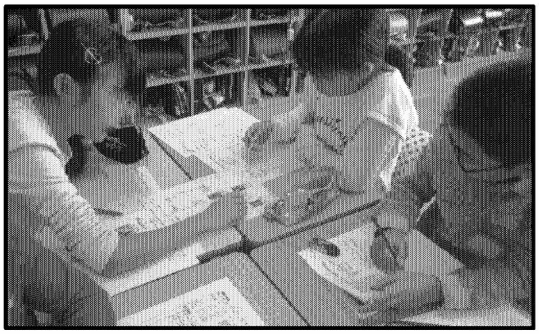
B　再度、やってみたいと感じている…11名

なごやめし作りではグループで違うものを作り、作り方も考えておいしいものが作れた。 また、クラスでオリジナルのなごやめしを作ってみたいと思った。

【資料25　分類Bの児童の記述】

○児童の具体的な発言や姿から

児童は、自分たちで考えた献立のアイデアを具体化しようと、書籍やインターネットを活用しながら、意欲的に取り組んだ。そのため、実習当日も、よりよいなごやめしとなるように、工程やレシピに変更を加えながら取り組む様子も見られた。



【資料26　話し合いの様子】

【検証項目３−②の考察】

実践の結果を見ると、32名中30名の児童が楽しかった・面白かったと感じていることから、新しいなごやめしづくりが児童の印象に強く残っていることが分かる。また、30名の児童の記述内容を分析すると、上手くいったという達成感や、児童主体でなごやめしを考え、仲間と協力して作る満足感という理由が多く見られた。なごやめしを作ることが児童にとっての喜びであり、上手くいったという満足感は、地域の食文化への関心を深めることにつながったと考える。

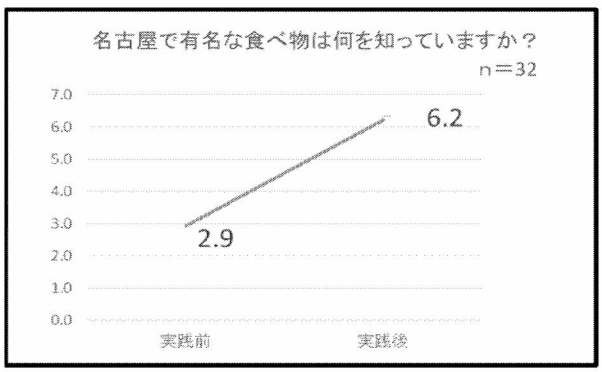
授業の中の児童の姿からも、児童が関心をもち行うことができたことが分かる。児童の関心を深めるという点においては、「なごやめし」についての学習は効果的であったと考える。

また、地域の食文化の良さを感じるという点においても、授業中の児童の姿から見ると、一定の効果があったと考えるが、記述内容には表れなかったことが残念である。

Ⅵ　研究のまとめ

（１）成果

児童の名古屋市の食の魅力に対する意識調査として、実践前に調査したものと同様の質問紙による調査を行った。「名古屋で有名な食べ物は何を知っていますか？」という質問に対する実践前後の結果を示す。



【資料27　名古屋市の食の魅力に対する意識調査】

実践前後の結果を見ると、実践前の平均2.9から実践後は平均6.2と大きく増加した。

次に、教師力向上実習Ⅱ後に、全ての授業の振り返りを行った際の児童の自由記述と、質問紙型アンケー

ト調査の結果からの分析である。

32 名中 23 名の児童が地域の食文化の良さに気付くことができた。以下、多くの気付きを記述した児童Ａの記述である。

> ・ みその食べ比べでは、味が種類によって違うのだと深いところまで分かりました。
> ・ 自分がなごやめしだと思っていなかったものも、なごやめしと知り、驚きました。
> ・ なごやめしづくりでは、みそは名古屋みそ（豆みそ）みたいで味が濃くとてもおいしかった。
> ・ みその話では、由来などを知ることができ、とても勉強になった。なごやめしにたくさんみそが使われている理由がよく分かった。郷土食の魅力を知れたし、昔からあるものなんだなと思った。

【資料 28　児童Ａの記述】

この児童は、質問紙型アンケートでは、なごやめしの魅力として、「みそ」を使っていること、手軽に食べられること、濃い味を挙げている。記述内容と合わせて分析すると、児童Ａはなごやめしに使われているみそが地域の独特のものであること、なごやめしが身近なものであることに気付いている。そして、それが地域の食文化の魅力であると気付いている。

以上のことから、本研究により、７割の児童が郷土食の魅力に気付くことができたと考える。

（２）課題

手立て①　学校給食の活用

本実践では、児童に興味関心をもたせるために学校給食を活用し、一定の効果があった。しかし、授業の中で、学習するだけでなく、実際に調理している所を観察したり、調理員さんに話を聞いたりすることでより一層興味関心をもつことができたと考える。

手立て②　地域教材の活用

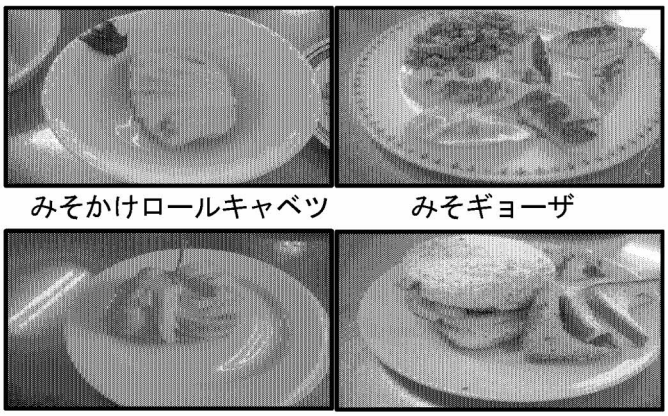
児童にとって、当たり前に身近にあるものを教材として活用し、地域の魅力に気付くためには、地域を改めて知ることが重要である。そこに気付かせるためには、地域の人との連携を図ることが必要であると考える。学校内だけではなく、地域で学習することで、地域教材を用いる学習効果が高まるのではないかと考える。

手立て③　体験学習

本実践では、みそや野菜の食べ比べ活動、新しいなごやめしづくりを体験学習として活用した。みその食べ比べ活動では、地域の食文化の良さを感じさせることが難しかった。体験学習は児童が意欲的に学習に取り組みやすく、楽しく活動ができる。しかし、一方で精選した教材を提示しないと、楽しい活動だけで終わってしまうと考える。児童が楽しく学習できる体験学習だからこそ、ねらいに適した教材や授業展開を作る必要がある。

Ⅶ　おわりに

本実践を終えて、児童の豊かな発想力に驚いた。調理実習ということで、多くの制限がある中で、児童たちはたくさんの工夫を取り入れていた。実際に児童たちが考えた「新しいなごやめし」を以下に示す。



みそかけロールキャベツ　　みそギョーザ

みそ巻きキャベツ　　みそカツサンド

【資料 29　児童が考えた「新しいなごやめし」】

実践後に行った質問紙型アンケートによると、豊かな発想力で新しいなごやめしを考えた子どもたちの９割は、「名古屋の良さが全国に広がって、多くの人に食べてほしい」、「このまま続いていってほしい」という願いをもっている。これは、名古屋をより良くしていきたいという意思の現れではないだろうか。

私は、名古屋に愛着を持ち、「名古屋が大好きだ」と言えるような、子どもたちを増やしていきたい。そして、この生まれ育った名古屋で食育を続けていく。

引用・参考文献

※１）「食育基本法」（2015/９/11）
※２）「新学習指導要領解説」（文部科学省、2017/３）
※３）「第３次食育推進基本計画」（内閣府、2016/３）
※４）「食に関する指導の手引き」（文部科学省、2010/３）
※５）「学校給食法」（2015/６/24）
※６）次山信男「教職研修総合特集 No.87　地域素材の教材化読本」（教育開発研究所、1992）
※７）加藤幸次「小学校　体験学習の進め方」（教育出版株式会社、1984）
・名古屋市観光文化交流局「都市・ブランドイメージ調査結果」（2016）
・北俊夫「いまこそ知りたい！食育の授業づくり」（株式会社健学社、2013）
・北俊夫編「学校給食を活性化する食育実践」（明治図書、2007）

【付記】

本研究を行うにあたり、連携協力校にて１年半にわたるサポーター活動や教師力向上実習Ⅰ・Ⅱを、名古屋市立公立小学校では教師力向上実習Ⅲを、豊田市立公立小学校では特別課題実習をさせていただきました。実習中はご多忙の中、多くのご指導・ご助言をいただき、大変有意義な時間を過ごすことができました。お世話になった全ての先生方に、心から感謝申し上げます。

最後になりましたが、教職大学院に在学した３年間でお世話になった伊藤幹夫先生、瀧田健司先生をはじめ、多くの先生方に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。